伊藤整「氾濫」を通過点としたポストモダン文学の考察

伊藤　昭一

今日、文芸批評の混乱と衰退の度合いが著しい。ポストモダン社会とされる時代になって、文学の世界においてもカルチャーとして主流に存在していた力を、失いつつあるためであろう。

その要因には、マルクス主義思想を中心にした、社会の歴史的発展段階論による思想論理の不適合に原因があるとされている。同時に、サブカルチャーの大衆化が強まった。そのためコンテンツ商業資本が文学をコンテンツの一部に取り込む現象が起きている。

世代交代によって、アニメ化など社会の大衆娯楽のジャンルが多様化しているのである。

サブカルチャー世代の勃興期の例をあげると宇野常寛「ゼロ年代の想像力」（早川書房）の著作がある。これは、ゲーム、アニメなどの娯楽的素材になかに、文芸作品が想像力コンテンツとして包みこまれている。

従って、対象作品にはアニメ「新世紀エヴァンゲリオン」、「デスノート」などから、文芸作品の「野ブタ。をプロデュース」、「バトルロワイヤル」（小説が原作で、マンガ化・映画化された）まで、広範囲にわたっている。

乱暴な紹介をすれば、「新世紀エヴァンゲリオン」の主人公を「引きこもり」型人物とした場合、その社会背景には、「努力しても報われない社会」と「努力して成果を上げないと人格を認めない社会」の存在がある。そして「行動すれば他人を傷つけるだけ」という消極的発想の蔓延傾向が指摘されている。

一方で「デスノート」や「バトルロワイヤル」では、その物語の特性を、現状の社会にどんな不満があろうとも、それを受け入れてサバイバルな戦いをすることを決断する発想――「決断主義」という分類をしている。

さらにポストモダンのもうひとつのカルチャー現象は、小説のジャンルに「スクールカースト文学」と呼ぶべき領域が成立していることである。

ネットの小説投稿サイト「小説家になろう」には、「スクールカースト」というカテゴリーが作られてい

る。

そこには二〇一八年六月の段階で、二三八件が検索できる。まんが原作者で、評論家の大塚英志は著書「感情化する文学」（太田出版・二〇一六年）のなかで「スクールカースト文学論」を独立項目に仕立てている。その時点では、二〇一六年六月には、七七件だったとあるので、二年後に三倍の投稿数になっていることがわかる。

これら社会現象として最初に問題提起したのが二〇一二年に刊行された「教室内（スクール）カースト」（光文社新書）とされている。

大塚英志は、「感情化する文学」でこのジャンルが、二〇〇〇年を起点とした新世紀「ゼロ世代」へ向けての初期微動であったろうという推測をしている。

そして次のように論じている。

――『「スクールカースト」論へアプローチをした鈴木翔は、彼の著書が刊行された二〇一二年当時、東京大学大学院の博士課程にいた。このように同書で言及された項目を時系列で並べていったとき、この主題が新世紀の始まりごろに浮上して、小説の主題となり、同時に社会問題化していったのだとこのあたりの事情に疎かったぼくにも想像だけはつく。

鈴木によれば、少女まんがの領域でも二〇〇〇年ごろからこのモチーフが現われていると言い、またＷＥＢ上では「文学」においても、佐藤友哉『エナメルを塗った魂の比重』（二〇〇一年）、綿矢りさ『蹴りたい背中』（二〇〇三年）、桜庭一樹『推定少女』（二〇〇四年）あたりの作品がスクールカースト的主題を扱ったという見方もある。なるほど、ぼくが小説に関心を失っていくあたりと前後して出てきた主題なのだ、と何となくわかる。

こういった「ランクづけ」が世相化したのはＡＫＢの「総選挙」あたりなのかとウキペディアで調べてみると、「総選挙」は二〇〇九年が始まりで、なるほど「ゼロ年代」や「ロスジェネ」と称していた二〇〇〇年代の批評や文学のなかで表層化してきた文化であり、主題なのだ、とあらためて思う』――と記している。

その上で、朝井リョウの小説「桐島、部活やめるってよ」を従来のスクールカースト小説と異なって画期的だとする。それは、それ以前は、学級における上下関係が、階級化に捉えることが可能で、その現象に批判的な視点があったのだという。

それが、朝井リョウの「桐島」では、そこに見える格差を単なる現象として俯瞰的に捉えて、その現象を

批判的に視る視線がないということを、画期的だと評するのである。

大塚は、現代のポストモダン社会において、スクールカーストを制度として捉え、その制度を変えることなく、自分を変えてしまうという発想が生まれていることを指摘する。

☆

このような現象の把握の仕方の底流には、資本主義社会が段階を経て成熟していくなかで、学校という制度のなかのシステムが強固な構造をもっているという前提がある。そして、その制度の位置取りは、自己責任によるしかないという発想を生んでいると見られる。

このことは、かつての社会の発展にかんする大きな物語である、資本主義社会における階級闘争の消失に相当するとも考えられるのである。

社会評論における文学との関わり方は、あくまでも、現在の社会の傾向がどのようなものであるかを、総合的にイメージするための略画のようなもので、細部が正しいかどうかの問題ではなく、イメージの把握に合っているかどうかの問題である。

その底流にはカントやヘーゲルによる人間性の「普遍的」意味を追求した「存在論」と、マルクス主義思想における、社会の発展段階において「人間は何事をなすかによってその意義が価値づけられる」とする解釈問題を含んでいるように思える。

こうした論拠を含んだ評論は、たしかに大衆社会の傾向把握のイメージ化には役立つが、文学の範疇とやや乖離せざるを得ない事実がある。文学の世界だけでこうした論議ができないものであろうか。

ここでは、ポストモダンの前段階において昭和三十二年（一九五七年）頃発表された伊藤整の『氾濫』という長編小説の存在について、モダン社会の文学的な基盤にかかわる意義を問題提起としてみたい。

☆

伊藤整（一九〇五年～一九六九年）といっても、今はあまり彼の本をみかけない。一昔前の文壇では活躍した作家だ。理論と実践を兼ね備えた研究肌の作家だった。代表作が『氾濫』で、これを最大に評価していたのが、北原武夫（一九〇七年－一九七三）という作家である。

北原武夫といえば、大森の馬込に住み、作家・宇野千代と結婚。夫婦で雑誌『スタイル』をヒットさせたという実績がある。いわゆる三田文学派とでもいうのか、作家で文芸評論家だった北原は、オーソドックス

な文学的眼力の持ち主であった。

たとえば当時の新進人気作家・石原慎太郎の『亀裂』という作品に対して『中間小説にも劣る荒っぽさ』『作家精神の幼稚さ』などを指摘している。

だいたい北原は、石原の作品は好きではなく文学的評価を低くしか見ていない。どちらかというと、坂上弘のような（三田派か？）端正ですっきりとした文体の作風を好んだようだ。

いずれもして、その文学的基準がはっきりしているところが、今回の考察に具合が良いのである。

北原氏は『氾濫』の以下の部分を引用し、これが小説造型上の新しい手法だとして「氾濫」について、文芸誌「新潮」に文芸評論を連載中から、この作品に注目していた。

――『今までの日本の小説には見られなかった新しい小説造型の一見本を呈出している点で、いろいろな意味でリアリズムという十九世紀的手描法からどうしても脱し切れないでいるばかりか、一種の日本人気質から、最近では特に文体というものを蔑視しがちな日本の文壇にとって、それ自体大きな功績ではないかと思う』（講談社「北原武夫文学全集・第五巻」より。以下、引用文は同じ）としている。そして作品にある次のような文章に注目している。

――『妻子を疎開地へやっている間に、幸子とのつながりができた時、彼ははじめて本当に女に触れたことを実感した。幸子が彼に与えた女というものは、孤立した純粋な女であって、妻や主婦としての文子から感じる女とまったく違っていた。その女は、彼の持ち帰る収入で絶えず家計の辻褄を合わせようとする主婦でもなく、子供のオムツを洗い、子供の教育や将来の生活のために貯金を考える母親でもなく、また、私はあなたの子の母親でもある私を死ぬまで安らかに暮らさせる義務があるのですよ、という雰囲気を絶えず彼の目の前に漂わせて鼻先に座っている生涯の伴侶でもなかった。その頃の幸子は、ほっそりした男のような感じのする処女がそのまま教師の型になりかかったような二十八歳の女であり、女性の優しさや柔軟さというものは、むしろ乏しかった。しかしその女は、彼の性によって目覚まされた感覚を、その乳房に、その両脚の間の柔らかな秘密の場所に持っていて、それが故に、離れていても、絶えず彼の存在を意識し、彼を純粋に男性として待ち受けているところの、湿り気のない彼女そのものであった。その意識が彼を幸子に夢中にさせたのだった。』――

ちょっと硬質な表現だが、社会的な存在としての自意識をもって、男の欲望を分析的に表現した文体になっている。余談だが、伊藤整は翻訳家でもあり、そのなかでロレンス『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳では、猥褻裁判にかけられた。こっちのほうが知られているのかもしれない。

☆

北原は、「氾濫」の文体をこう評している。

――これだけの文体の中でも、一読して明瞭なのは、感覚と意識を一緒くたにして、あるいは打って一丸として、描写していた従来のリアリズム的手法が、きれいサッパリと言っていい位、見事に払拭されていることだ。（中略）全く、悉くが説明だ。

「説明」というものを極度に嫌い、あるいは恐れた、いわゆる描写という従来の小説概念からいうと、これほど小説的手法から遠ざかり、これほど小説的手法を無視した手法はあるまい。が、それにもかかわらず、すべて説明から成ったこの文体が従来のリアリズム的手法から成った小説に比べて、読者の頭に、より明快な、より明晰な小説的映像を与えるのは、何故なのだろう。官能描写や感覚描写が少しも用いられていないにも拘わらず、小説として明確な造型感を、読者の頭にはっきりと与えるのは何故なのだろう。――

――つまり、ある心理が人間のうちに生起する基盤である、日常生活上の根本的なシュチエイションや事態についての、分析的説明なのである。

たとえば、今挙げた箇所でいえば、「彼の持ち帰る収入で絶えず家計の辻褄を合わせようとする主婦」とか、「子供のオムツを洗い、子供の教育や将来の生活のために貯金を考える母親」とかいう文子に関する説明的な箇所は、従来のリアリズム手法による作家だったら、「世帯の垢が身についた妻」とか、「すっかり世帯じみてしまった妻」とかというふうに、もっとも簡潔な手法で、簡単に描写し去ったであろう」――

☆

私も『氾濫』を読んだ時に、新鮮なものを感じた。当時の私は、野間宏の「真空地帯」を代表とする、いわゆる「全体小説」論というものに傾倒していた。

その人間の社会組織と個人の関係を総括的に把握しつつ描くものとして、新鮮な手法だと感じた。が、あのように人間を描くことは、なにか人間を卑小なものに捉えてしまうものだな、と思った記憶がある。それを明らかにしたことだけでも、価値があると思ったものである。

つまり、人間はいくら教養を積んでも、どこか他人との関係について、小心翼々としてすごしている、というあまり面白くない人間の本質について表現し、人生のつまらない側面を味わされたということなのだ。

北原の評論は、当時の小説表現（モダン的）に対して、なんらかの標準となる基準があり、それに対して作家がどれだけ新しい表現技術を開拓したか、が評価されている。そして、その基準を北原が確信をもって語るということは、その解釈に暗黙の了解が存在したということだ。実際、私もこの解釈を読んで、そうだったのか、と勉強になった気がしたものだ。

だが、世代交代が進むと、社会的な環境の変化から、価値観や感覚が変化している。

その世代間の異なる発想の生まれる典型的な事例を、幼少時代の社会参加における労働生産者の立場と、はじめてのお使いの消費者の立場の差に見る。

モダン社会では、家内労働や丁稚奉公が社会的な生産活動につながっていた時代であった。この生産活動によって、自らが社会に役立っているという意識が生まれていた。家族や社会における存在の承認を得ていたという時代である。

そうすると、モダン社会の時代感覚の細部まで受け入れられるのは、一九六〇年代までに少年少女時代を過ごした世代までであろう。

私自身、一九四二（昭和十七）年生まれである。少年時代の家業が東京湾での漁師であったため、中学時代に漁の最盛期には、休日などは、父親とともに漁船に乗って出漁し、仕事を手伝わされていたのである。

また、中学校時代の同級生であった花屋の息子は、学校の授業が終わると、夜に親と一緒に銀座に連れていかれた。そこで通勤帰りの若い女性をみつけ、すぐさま駆け寄って、「花を買ってくれませんか」と声をかけることを親に命じられ、売り上げに協力したという。学校ではいかつい体格をした悪ガキ大将だった男が、「それが恥ずかしくて、恥ずかしくて、あんな辛いことはなかった」と後のちまで、語っている。

また、文学活動を通じて知り合った同い年の友人は、親が満州からの引揚者で、仙台に住み、中学卒業後、十五歳で親から親類である商店に丁稚奉公をさせられている。

これは当時の敗戦による資産喪失に直面していた家庭の場合だが、例え裕福の家の子供であっても、何らかの家事の手伝いはさせられていた筈である。

その時代の子供たちは、「なぜ、自分がそれをしなけ

ればならないか？」と親に問うことはなかったはずである。それは社会的な構造のなかで自明の理であったからである。

☆

一九六〇代以降、経済成長と人口増により、第一次産業の農業地帯から労働者が移住し、働く人の五〇％がサラリーマンとなっていった。

一九七五年には、七五％がサラリーマンになる。封建主義の江戸時代の小説には、武士や侍や農民がサラリーマン化して登場しているが、それに違和感を訴える声は出ない。

こうした家庭の子供たちに、家業を手伝う機会はない。また就業規則がない丁稚奉公という制度も消滅していった。

つまり、この年代以降の子供たちは、社会の生産的活動に参加できなかったし、しなかった。そのかわりに家事手伝いはできたかもしれない。それはしかし、母親の台所の手伝いや、頼まれた「お使い」くらいであったろう。「はじめてのお使い」というテレビ番組がヒットしたのも、この時代だからこそである。

これは、とりもなおさず、生産活動で労働力として社会参加した親のもと、その子供たちは、消費者であるお客様としての社会的待遇を受けているということだ。彼らは、商品選びにあたって、価格に比較してどちらが、役立つか目利き能力を鍛えられるようになる。

販売者側のおもてなしを受けて育った子どもたちは、金を持つことは、自分の存在承認感覚を肥大させることだと学ぶ。学校へは授業料を払う消費者意識を持ちこむ。おもてなしを受けるべきという意識。そうして大人になってきた。労働力として、家族からその存在を重要視される要素はない。それが家族関係の希薄さに拍車をかけた。

社会の変化が、子供たちの生活意識に影響し、学校でも「この勉強をすると何の役に立つのか」や「なぜ人を殺してはいけないのか」という直接的功利意識にそぐわない物事に疑問を呈するような発想を抱かせるようになった。

何年か前の友人の経験だが、近所の家の中学生たちが路地裏、タバコを吸っているのを見た。そこで、「君たち、それは良くないだろう。やめないさい」と注意したという。

すると、彼らは手にしていたタバコを捨ててから、「なんだよ。なにが良くないんだよ」と反論したという。そこで、「タバコだよ。今捨てただろう」と、指摘

した。すると彼らは「吸ってねえよ。文句をいうなよ」と言ったという。

その友人は「僕が驚いたのは、明白な証拠のある事実をその場で、すぐ否定したことなんだ。事実を平気で偽ることができる精神をもっている倫理観のない姿だよ」と彼は嘆いたものだった。

人間社会で、人として、やってよいことの基本は、「全員がそれと同じことをしても、社会秩序が成立する場合のみである」という真善美の原理を実感として理解できなくなったということを示している。あるいは、社会的な雰囲気の束縛が強く、物事の解釈が単純でなくなってきている、ということの反映でもある。

例えば、学校に通うといえば、高齢者は勉強をすることだけを考える。しかし、現代は、いじめがあり、友達との情報交換がスムーズにいくことが主体であるのかも知れない。クラスで世間話の仲間に入るために、何について知っていなければならないか。それが、どれほど重要かは、高齢者にはわからない。

特に、家業の生産を手伝う必要のある子供には、帰って家の仕事を手伝うことが求められる。遊びたくとも、まずそれを優先するために我慢をするという忍耐心が備わる。引きこもりをするという発想も出ない。自分が家族を支える存在であることを、無意識に自覚させられていたのだ。

しかし、核家族で自分のしたいことを自由にできる身分では、関心は仲間作りであり、ペットの世話であろう。彼らが通念としている価値観に沿った小説やマンガ、ゲームなどでないと商品として消費しない。そうすると、自分のもった価値観を変えなければならないものは、面倒でウザいのである。簡単に共感できるものに、熱中しブームに乗り、それに同調する。

しかし、純文学の本質は、日々の安楽な生活に疑問をもち、自己のあるべき姿にこだわるということを強いるところがある。自分は何をしているのか、それで良いのか？　ということを問いかける作用を持つものが、なければならない。

これに関連して、伊藤整は、作品「地中海」で第四回芥川賞（昭和十一年・一九三六年下期）を受賞している富沢有為男が、新聞に「文学は人間のエゴの醜い姿を描き出すから、有害である」と書いていたことに同感したが、なぜか今も自分は書いている――と何かに記しているのを記憶している。（了）